

大森悦子歌集

『青日溜まり』

(本阿弥書店)

著者の第二歌集。著者はシドニーで五年、シンガポールに四年を過ごし、その間の経験を鋭く豊かな感性により多くの歌にしている。

クローバーを食み続けている羊いて埋もれた手紙のよう
な秋なり

神聖なるミルクの壺を掲げ持つヒンドゥー教徒の肩に
日の落つ

一首目。羊の食む草をクローバーと限定したことで情景がくきやかになる。埋もれた手紙という比喩がいい。落ち葉の折り重なりや、静けさが想起される。二首目。この光景は、私たちにとってはなかなか日常的ではない。しかし、ヒンドゥー教徒にとつてはこれこそが日常なのであろう。

確かな一拍の静謐さが「日の落つ」という言葉の中にある。こういった異国情緒のある歌がちからを持つのは、単に物珍しいからでは決してない。読者を真に惹きつけるのは、彼女の視点と表現である。

ボタン留めて襟を正してたつたいま脱いだばかりのた
ましい吊るす

脱いだ服をおぎなりにせず、きちんと吊るしてやる。それは彼女が着ていた服に「たましい」の名残を感じているゆえだろう。暮らしのおちこちに「たましい」を認める著者。彼女の歌世界は、青く豊穡である。(島本ちひろ)

橋本恵美歌集

『Bolland』

(青磁社)

『のらねこ地図』から十年を経て刊行された第二歌集。「ボラード」とは陸上に備え付けられた係船柱のこと。

珈琲のインクで描いているような日々老いびとと近く
暮せば

夫と子、義理の両親との生活が描かれる中で、実家への思い、父の病そして父の死も深く詠まれている。

ボラードの点々とある岸壁にわれを座らせ父が夜釣り
す

もう咳の起らぬ朝が父に来てはなびらのような銀髪に
触る

父親の死、家を出る子、家族を見送る著者は、ボラードのように佇んで自身の裡に耳を澄ませる。

教会は裡なる海に向かう場所ドームに六つの花形の窓
湯船に聴くふかき雨音 吾の裡の濡れない部屋を長く
温める

また、自然の彩の変化を敏感に受け止めながら、日々を
大切に過ごしている。

万緑に包まれ健やかなる昼餉召しませ誰かを看取りし
日にも

〈死〉をも織り交ぜながら、健やかであろうとする生活は続けられていくのだろう。

(田中 泉)